第７１回　中部日本高等学校演劇大会　生徒講評委員会講評文

名古屋南高校

「星たちは苹果の味を知る銀河鉄道と嘘」

２０１８．１２．２４　上演2

舞台はある秋の夜の丘、そこには満天の星が広がっていた。そこにいた「僕」が彼女を丘に連れてきたのは、ただ流星群を見に来ただけではなかった。十五年前に「僕」が出会った友人と交わした『約束』を果たすためでもあったのだ。小学４年生の時にクラスメイトに馬鹿にされた「僕」は、丘で「カンパネルラ」に出会った。その後何度も出会い、仲良く話し合える仲になったが、ある日突然「君のことが、大嫌いだ」とカンパネルラに言われてしまったのだ。そんな「僕(ジョバンニ)」の元へ現れたのは銀河鉄道ではなく、銀河トラックだった。

序盤にあったダンスで観客を引き込んでいたが、そこに意識を囚われないくらい、土台がしっかりとした物語や細かくキレのある演技にとても見入ってしまった。とりわけカンパネルラが女性という事実が最後に分かったとき、それまでの先入観が全てくつがえされてしまい、本当に最後まで目が離せない劇だった。物語の途中で登場したりんごやアンタレスの赤さから、叶わない恋と今にも消えてしまいそうなくらい儚いが、暗闇の中でも一人もがく少女の強さが表されていた。照明は、美しい秋の夜空や流れる流星群がとても美しく表現されていて、本当に丘の上にいるように思えた。子供の「僕」と大人の「僕」が２人とも舞台上にいるとき、話をしている方にスポットが当たっていてどちらの世界なのかわかりやすかった。音量やＢＧＭの入りが絶妙だった。台詞の前は大きく、台詞が入ると迷いなく音量を小さく変化していてとても迫力があった。舞台装置については、丘やトラックに変化していたが違和感がほとんどなかった。また、グニャグニャと歪んだ線路からは、今にも壊れてしまいそうな儚さや不安定な心情、嘘をあらわしているように感じた。

この物語から、希望を与えるためのありもしない嘘、人をだます嘘(詐欺)、相手を思った優しい嘘…嘘というたった一言の言葉に含まれている様々な意味や、その中にある本当の幸せについて考えさせられた。嘘は、自分を守ったり、人を騙したりするためだけにあるのではなく、誰かの幸せを思った優しい嘘という形もある。交わした約束が何年も前のことでも、守られなかったとしても、信じて待つ「僕」や彼女の信じる気持ち、初恋の相手のことを知らされてもハンカチを差し出す彼女の優しい強さ、恋をした相手の幸せを願って嘘をついた「カンパネルラ」の強さなど、様々な人間の強さが描かれていてとても美しい劇だった。